『東京大学言語学論集』**38** (2017.9) 233-245

ラルテー語における再帰・相互標識 *-duːnʌ̀*

大塚　行誠

キーワード：　再帰　相互　チン語支　ラルテー　ミゾラム

要旨

本論文は，チベット・ビルマ語派チン語支のラルテー語における再帰・相互標識 -duːnʌ̀ の形態・統語的な特徴についてまとめたものである。2017 年 3 月に筆者がインド共和国北東部のミゾラム州で行った言語調査のデータを基に記述した。ラルテー語における再帰・相互標識の -duːnʌ̀ は，拘束形態素として動詞の後に付加する。-duːnʌ̀ のほかに，-dutɩ̀ という語幹形式もあり，２つの語幹形式を持つ点で，動詞と似た形態的特徴を持つ。今回はその初期報告ということで，拘束形態素 -duːnʌ̀ を含む具体例を挙げながら，チン語支諸言語との対照的な観点から考察した結果を示す。

1. ラルテー語の概要

ラルテー語 (Ralte, ISO 639-3: ral) は，シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派チン語支に属する。Simons and Fennig (eds.) (2017) によると，2007 年におけるラルテー語の総話者数は 900 人程度である。そのラルテー語を母語とする人々のコミュニティーは，インド共和国ミゾラム (Mizoram) 州北部のほか，マニプール (Manipur) 州やトリプラ (Tripura) 州などにも点在している。

周辺の大言語にはミゾ語（チベット・ビルマ語派チン語支）がある。メイン・コンサルタントによると，ミゾ語と同じラテン文字の表記法を使ってラルテー語を記す習慣が昔からあるそうで，実際に，ラルテー語によって書かれた文芸作品や新約聖書などの刊行物は複数存在する。しかし，ラルテー語に関する言語学的な先行研究は，管見の限り，Grierson (1904)，大塚 (2015)，大塚 (2016) しかないようである (Hammarström, Forkel and Haspelmath 2017)。

現在，ラルテー語を母語とする話者の大半はバイリンガルであり，ラルテー語とミゾ語のどちらも流暢に話すことができる。日常の暮らしの中では，ミゾラム州の公用語であるミゾ語のほうを主要な生活言語として使うケースが多いようである。

本論文で研究の対象とする言語は，インド共和国ミゾラム州アイゾール (Aizawl) 市ボンコーン (Bawngkawn) 地区におけるラルテー語である。メイン・コンサルタントは現在ボンコーン地区在住で 1946 年生まれの男性，ラルラムザウヴァ・ラルテー (Lalramzauva Ralte) 氏である。筆者は 2017 年 2 月 27 日から 3 月 10 日にかけて，約二週間，断続的にインタビュー形式の調査を行った。同氏はアッサム (Assam) 州のシルチャル (Silchar) で生まれ，1976 年にミゾラム州のアイゾール市に移住した経歴を持つが，ラルテー語の運用能力には自信があり，各地のラルテー語話者を集めて，ラルテー語に関する勉強会やラルテー語の会話サークルなどを企画，

開催することもある。

さらに，同氏は第二言語習得に高い関心を持っている。ラルテー語とミゾ語のほか，ヒンディー語，ベンガル語，アッサム語も比較的流暢に話すことができ，現在は民間のヒンディー語学校も主宰している。英語でのコミュニケーションも可能であったため，現地調査では主にミゾ語と英語を媒介言語としてインタビューを行った。

ラルラムザウヴァ氏とのインタビューでは，初めに基礎語彙調査と簡単な文法調査を行った。その後，L.Y. Zahnuna (2013) に記載のあるミゾ語の例文を基に，日常生活でよく使われるラルテー語の文を採録した。

2. 音韻

2.1. 音節構造

ラルテー語の音節構造は，(C1) (V1) V2 (V3) (C2) /T と表すことができる。

このうち括弧内のものは任意要素である。C1 は頭子音，V1，V2 および V3 は母音，C2 は末子音，/T は音節全体にかぶさる声調を示す。

2.2. 子音

頭子音には /p, pʰ, b, m, f, v, t, tʰ, d, ṭ [ʈ], ṭʰ [ʈʰ], n, l, r, s, z, ɕ, c [tɕ], j [dʑ], k, kʰ, g, ŋ, ʔ, h/ がある。ミゾ語からの借用語には /cʰ/ [tɕʰ] も見られる。末子音には /p, m, t, n, l, lʔ, r, rʔ, k, ŋ, ʔ/ がある。

現代ラルテー語は，音韻と語彙の両面において，ミゾ語からの強い影響を受けている。基礎語彙調査の結果，頭子音の /f/，/ṭ/ [ʈ]，/ṭʰ/ [ʈʰ] および末子音の /rʔ/ の出現頻度はその他の音素と比べて明らかに低く，ミゾ語の影響によって生じた可能性もある。この詳細については，今後更に調査を進めていく必要がある。

2.3. 母音

短母音 /i, e [ɛ], a [ɑ], o [ɔ], u/ と長母音 /iː, eː [ɛː], aː [ɑː], oː [ɔː], uː/ がある。

V1 と V3 のどちらか一方，あるいはその両方に /i/ [i̯] または /u/ [u̯] を挿入することで二重母音や三重母音を形成する。

2.4. 声調

ラルテー語の声調素には，上昇調 / ˩˧ /，低平調 / ˧˧ /，下降調 / ˧˥ / の３種類があると考えられる。さらに，声調交替や連読変調も見られ，語あるいは形態素のピッチが，隣接する語または形態素の発音に従って変化することがある。

例えば，上昇調の音節の後に下降調の音節が続く場合，先行する音節の上昇調は低平調になる（例 (1) 参照）。

(1) tʰei˩ + =ou˥˩ → tʰei˩˨ =ou˥˩
知る[I] =NEG[I] 知る[I] =NEG[I]
「知らない」

声門音 /ʔ/ か声門化音 /ˀ, r̰/ を末子音に持つ閉音節，あるいは母音の部分が短母音単独で現れる促音節（無声破裂音を末子音に持つ閉音節）は，原則として低いピッチ /˩˨/ で発音する。しかし，低平調の音節の後に上述の種類の音節が続く場合，当該の閉音節は常に高いピッチ/˥/ で発音する。

上述の連読変調の具体例として，完了を表す助詞 =kaʔ˩˨「もう～した」を使った句を以下 (2) に示す。上昇調または下降調の後に続く場合は =kaʔ˩˨（例 (2) a, b. 参照）と低いピッチで発音し，低平調の後に続く場合は =kaʔ˥ （例 (2) c. の太字部分参照）と高いピッチで発音する。

(2) a. se˩˨der˩ =kaʔ˩˨
go.bankrupt[I] =PERF
「もう倒産した」
b. kel˥˩ =kaʔ˩˨
go[I] =PERF
「もう行った」
c. ka:p˩˨ **=kaʔ˥**
shoot[I] =PERF
「もう撃った」

3. 考察

3.1. ラルテー語における再帰文と相互文

V を述語動詞，S を自動詞文の単一項とし，他動詞文の２つの項のうち動作を開始し遂行する項を A，そうではない方の項を P とすると，ラルテー語の自動詞文における基本語順は SV（例 (3) 参照），他動詞文における基本語順は APV（例 (4) 参照）である。形態的能格性を持ち，S と P にあたる名詞句には何も付けない一方，A にあたる名詞句には能格の後置詞 =in˩ を付加する。ただし，動詞の前に置かれる人称助詞は文中の自動詞または他動詞の主語の人称と一致する。

(3) tʰaŋ˥˩a˩˨ a˩= kap˥
PR 3= cry[I]
「タンガは泣いた。」

(4)　tʰaŋ˩˧a˨˩˦　=in˧˥　zua˨˩˦ʲi:˩˧　a˨˩˦=　tʰat˥˧
PR　=ERG　PR　3=　kill[I]
「タンガはズアリーを殺した。」

動詞の後に拘束形態素 -du:n˧˥ を付加することで，再帰標識として行為の動作者と対象が同一の指示対象であることを示すか（例 (5) 参照），あるいは，相互標識として複数の人または物が互いにしあう行為を示す[1]（例 (6) 参照）。相互文と再帰文は，参与者同士明白な違いがあると言えない点で概念上類似した特徴を持ち，通言語的に見ても，両者を同じように表現する言語は多い (Payne 1997: 198–203, Dixon 2012: 138–145)。ラルテー語でも，再帰を示す標識と相互を示す標識は同一形式である。

(5)　zua˨˩˦ʲi:˩˧　ʔa˨˩˦=　tʰat˥˧　-du:n˧˥
PR　3=　kill[I]　-RECP/REFL[I]
「ズアリーは自殺した。」

(6)　zua˨˩˦ʲi:˩˧　=leʔ˨˩˦　tʰaŋ˩˧a˨˩˦　ʔa˨˩˦=　tʰat˥˧　-du:n˧˥　=uʔ˨˩˦
PR　=and　PR　3=　kill[I]　-RECP/REFL[I]　=PL
「ズアリーとタンガは殺し合った。」

3.2. -du:n˧˥ の形態的な特徴

ラルテー語をはじめ，多くのチン語支の言語において，動詞は２つの語幹形式を持つ (Hillard 1974, Matisoff 2003)。本論文では，このような２つの語幹形式のうち，無標の語幹形式を「語幹形式Ⅰ」と呼び，名詞節をはじめとする一部の従属節（例 (7), (8) 参照）や疑問詞疑問文における述部（例 (7) 参照）の中など，ある一定の統語的環境下で現れる語幹形式を「語幹形式Ⅱ」と呼ぶことにする。

ラルテー語の再帰・相互標識にも２つの語幹形式があり，動詞の場合と同じ環境下で語幹形式が交替する。語幹形式Ⅰは -du:n˧˥ であり，語幹形式Ⅱは -dut˨˩˦ である。-du:n˧˥ と -dut˨˩˦ のどちらも再帰または相互を示す標識であり，統語的な要因によってどちらの形式を使うかは決まっている。この種の語幹形式に関する現象はもっぱら動詞に見られるもので，動詞以外の品詞や接辞には見られないものである。

ゆえに，ラルテー語の再帰・相互標識は，語幹形式Ⅰ -du:n˧˥ と語幹形式Ⅱ -dut˨˩˦ という２つの語幹形式を持つ点で動詞と似た形態的特徴を持つと言える。

---

[1] 現調査段階で得られているデータからは，拘束形態素 -du:n˧˥ が語の直後に現れていることが分かるので，接尾辞 (suffix) として扱っている。しかし，これが句のレベルで付加している拘束形態素，すなわち接語 (clitic) である可能性も排除できない。語に付加しているのか，あるいは句に付加しているのかといった問題を解決するには，今後更にラルテー語のデータを集めながら，精査していく必要がある。本論文中では便宜上接尾辞として扱いながら考察を進め，例文でも接辞境界を付けた-du:n˧˥の形で表すことにする。

(7) kʰoi˥˩ =aʔ˩˧ =ha:˩ bua˩˧ -dut˩˧ =na˩˧ pin˩˧dan˩˧ a˩˧= om˩˧
where =LOC =DET bathe[II] -RECP/REFL[II] =SUBORD room 3= exist[II]
「どこに水浴びをする部屋がありますか？」

(8) si˩˧ -dut˩˧ ka˩˧= nuam˩˧ =e:˥˩
wash[II] -RECP/REFL[II] 1= want[I] =PTCL
「私は自分自身を洗いたいです。」

相互文では，-du:n˩˧ の付いた動詞の後に，任意的な要素として後置詞 =he:l˩˧「互いに」を置くことが多いとインフォーマントから指摘があった（例 (9) 参照）。一方，再帰文では，例 (10) のように，２つの同一の人称代名詞を接続助詞 =leʔ「～と」でつなげた名詞句を「自分のことを」という意味で用いることがある。

(9) tʰaŋ˥˩a˩˧ =leʔ˥ zua˩˧ji:˥˩ =cuʔ˩˧ a˩˧= hma˩˧ŋaiʔ˥ -du:n˩˧ =he:l˩˧ =uʔ˩˧
PR =and PR =DET 3= love[I] -RECP/REFL[I] =mutually =PL
「そのタンガとズアリーはというと，互いに愛し合っている。」

(10) tʰaŋ˥˩a˩˧ =cuʔ˥ ʔa˩˧maʔ˥ =leʔ˩˧ ʔa˩˧maʔ˥ a˩˧= hma˩˧ŋaiʔ˥ -du:n˩˧
PR =DET 3SG =and 3SG 3= love[I] -RECP/REFL[I]
「そのタンガはというと，自分のことを愛している。」

3.3. -du:n˩˧ の機能に関する問題

拘束形態素 -du:n˩˧ は動態動詞に付加して相互の動作を表すだけではない。状態動詞に -du:n˩˧ を付加して相互の関係を示す場合もある。

例えば，(11) の他動詞 baŋ˩˧「～に似る」の例を見てみよう。baŋ˩˧「～に似る」は状態動詞にあたるが，その後に相互の関係を示す標識 -du:n˩˧ を付けて「互いに似ている」と表現することも可能である（例 (12) 参照）。例 (11) と (12) を比べると，他動詞 baŋ˩˧ に -du:n˩˧ を付けることで，動詞の取る項が１項減って自動詞になることが分かる。

(11) tʰaŋ˥˩a˩˧ =in˩˧ zua˩˧ji:˥˩ ʔa˩˧= baŋ˩˧
PR =ERG PR 3= resemble[I]
「タンガはズアリーに似ている。」

(12)　tʰaŋ˩˧a˩˨　=leʔ˩˨　zual˩˨i:˧˥　a˩˨=　baŋ˧˥　-du:n˧˥　=he:l˧˥　=uʔ˩˨
PR　=and　PR　3=　resemble[I]　-RECP/REFL[I]　=mutually　=PL
「タンガとズアリーは互いに似ている。」

さらに，自動詞 na:i˩˨「近い」など，２点間の距離を表す動詞にも相互の関係を示す標識として -du:n˧˥ を付加することがある（例 (13) 参照)。

(13)　na:i˩˨　-du:n˧˥
near[I]　-RECP/REFL[I]
「近い」

nei˧˥ は「持つ」あるいは「娶る」という意味を持つ他動詞である（例 (14) 参照)。しかし，例 (14) にも示したとおり，相互の関係を示す標識 -du:n˧˥ を付けて，「結婚する」という意味を表すこともある。例 (14) と (15) を比べると，他動詞 nei˧˥ に -du:n˧˥ を付けることで，動詞の取る項が１項減って自動詞になっていることが分かる。

(14)　tʰaŋ˩˧a˩˨　=in˧˥　zual˩˨i:˧˥　a˩˨=　nei˧˥　nuam˩˨
PR　=ERG　PR　3=　have[II]　want[I]
「タンガはズアリーを嫁にしたいと思っている。」

(15)　tʰaŋ˩˧a˩˨　=leʔ˩˨　zual˩˨i:˧˥　ʔa˩˨=　nei˩˨　-du:n˧˥　=he:l˧˥　=uʔ˩˨
PR　=and　PR　3=　have[I]　-RECP/REFL[I]　=mutually　=PL
「タンガとズアリーは結婚した。」

身づくろいや準備に関する動詞にも -du:n˧˥ がよく付く。この点については，ハカ・ライ語における中動態標識にも同様の報告 (Yamamoto Smith 1998: 15-25, 40-44) が見られる。

(16)　na˩˨=　bual˧˥　-du:n˧˥　=kaʔ˩˨　=a:i˧˥
2=　bathe[I]　-RECP/REFL[I]　=PERF　=Q
「もう水浴びをしましたか？」

(17)　peiʔ˩˨　-du:n˧˥　=oʔ˩˨
prepare[I]　-RECP/REFL[I]　=IMP
「準備しなさい。」

動詞だけでなく，ka:r˧˥「間」といった名詞の後ろや，pa:˩˨「父」と ca:˩˨「子」からなる複合名

詞 pa˩ca:˩「父子」といった複合名詞の後に -du:n˩ が付き，相互の関係を表すケースも見られた（例 (18), (19) 参照）。ただし，-du:n˩ の付く名詞はごくわずかで，非常に限定的だと現時点では考えている。今後どのような名詞に -du:n˩ が付くのかについて注意しながら調べていく必要はあるだろう。

(18) naŋ˩maʔ˥˧ =leʔ˩ kei˩maʔ˥˧ ka:r˧˥ -du:n˩ =aʔ˩
2SG =and 1SG between -RECP/REFL[1] =LOC
i:˩ =maʔ˩ om˩ =ou˧˥
what =EMPH exist[1] =NEG[1]
「あなたと私との間には何もありません。」

(19) a˩= pa˩ca˩ -du:n˩ =uʔ˩
3= father and son -RECP/REFL[1] =PL
「彼らは父と子の関係であった。」

なお，名詞 ka:r˧˥「間」の場合，地名をはじめとした無生物名詞の相互関係を示す場合には，-du:n˩ が付かないようである（例 (20) 参照）。

(20) ca:n˧˥ma:˩ri:˧˥ =leʔ˩ boŋ˧˥ko:n˩ ka:r˧˥ =aʔ˩
PR =and PR between =LOC
「チャーンマーリーとボンコーンの間に[2]」

3.4. チン語支諸言語における再帰・相互標識

ラルテー語の母語話者が暮らす地域にはミゾ語の話者やティディム・チン語の話者も多く住んでいる。特に語彙の面において，社会的に優勢な地位にあるミゾ語からの影響は大きい。

ミゾ語とティディム・チン語はどちらもチベット・ビルマ語派チン語支に属し，さらに詳細に見ると，ミゾ語は中央語群，ティディム・チン語は周辺語群の北部諸語という別個の下位カテゴリーに属する (VanBik 2009: 23)。この系統分類に従えば，ラルテー語は周辺語群の北部諸語に属すると考えられる (Simons and Fennig (eds.) 2017)。

この節では，上記のミゾ語とティディム・チン語の例に加え，チン語支中央語群のハカ・ライ語，周辺語群の南部諸語にあたるダーイ・チン語とも対照しながら，ラルテー語における再帰・相互標識の特徴について考察していく。

以下，ティディム・チン語[3]（例 (21) 参照），ミゾ語（例 (22) 参照），ハカ・ライ語（例 (23)

[2] チャーンマーリー (Chanmari) とボンコーン (Bawngkawn) は，どちらもアイゾール市内にある地区名である。
[3] 本論文におけるティディム・チン語の例は，全てティディム・チン語を母語とする Pau Sian Lian 氏（20 代男性，ミャンマー連邦チン州ティディム出身，2017 年 3 月の時点で留学生として東京に在住。）に提供して頂いた。

参照），ダーイ・チン語（例 (24) 参照），ラルテー語（例 (25) 参照）における再帰・相互標識の例をそれぞれ挙げる[4]。ティディム・チン語とミゾ語の音素表記は本論文におけるラルテー語の表記法に従い，ハカ・ライ語とダーイ・チン語の音素表記および形態素分析は各引用文献の手法に従う。

どの言語においても，再帰または相互を示す拘束形態素は同じである。ただし，ティディム・チン語の場合は ki˩-，ミゾ語の場合は in˩-，ハカ・ライ語の場合は ʔii-，ダーイ・チン語の場合は ng- を動詞の直前に置くことで再帰または相互を示している。ところが，ラルテー語の場合のみ，動詞の後に再帰・相互標識の -du:n˥ を置いている点で特異だと言える。

(21) a. kei˥ =leʔ˩ kei˥ ki˩- ge:n˥
1SG =and 1SG RECP/REFL- speak.to[I]
「私は独り言を言った。」 ＜ティディム・チン語＞

b. kei˥ =leʔ˩ naŋ˥ ki˩- ge:n˥
1SG =and 2SG RECP/REFL- speak.to[I]
「私とあなたは話し合った。」 ＜ティディム・チン語＞

(22) a. kei˥maʔ˩ =leʔ˩ kei˥maʔ˩ ka˥= in˩- bia˩
1SG =and 1SG 1SG= REFL- speak.to[I]
「私は自分に話しかけた。」 ＜ミゾ語＞ (Chhangte 1993: 93)

b. kei˥maʔ˩ =leʔ˩ naŋ˥maʔ˩ kan˥= in˩- bia˩
1SG =and 2SG 1PL= REFL- speak.to[I]
「私とあなたは互いに話し合った。」 ＜ミゾ語＞ (Chhangte 1993: 93)

(23) a. (ʔan-maʔ-le-ʔan-maʔ) ʔan-ʔii-thooŋ
themselves[5] 3PL-REFL-hit[I]
「彼らは自分たちを殴った。」
＜ハカ・ライ語＞ (Yamashita Smith 1998: 6)

b. nii-huu lee ceumaŋ ʔan-ʔii-thooŋ
PR and PR 3PL-MM-hit[I]
「ニーフーとツェウマンは殴り合った。」
＜ハカ・ライ語＞ (Yamashita Smith 1998: 9)

---

[4] 各言語における再帰・相互標識は，再帰と相互の他に，様々な機能を持つこともある。本論文では再帰と相互に考察対象を絞って議論を進めていく。

[5] グロスと音素表記は Yamashita Smith (1998) に従う。本論文の表記と分析の方法に従えば，ʔanmaʔ =le ʔanmaʔ (3PL =and 3PL) と表記できるであろう。グロスの "MM" と "REFL" も含め，原則として先行文献に記載のあるグロスと音素表記をそのまま掲載している。Chhangte (1993) による例についても同様である。

(24) a. ng- thuh
REFL- turn.upside.down
「自身を覆う」 ＜ダーイ・チン語＞ (So-Hartmann 2009: 203)

b. ng- shoong
RECP- meet
「互いに会う」 ＜ダーイ・チン語＞ (So-Hartmann 2009: 206)

(25) a. ka˩= be˩ -duːn˩
1= speak.to˥ -RECP/REFL˥
「私は私自身に話しかけた。」 ＜ラルテー語＞

b. naŋ˩ =leʔ˥˧ kei˩ i˩= be˩ -duːn˩ =uʔ˩
2SG =and 1SG 1PL.INCL= speak.to˥ -RECP/REFL˥ =PL
「君と私は互いに話し合った。」 ＜ラルテー語＞

ミゾ語には，ラルテー語の -duːn˩ と類似した形式の =duːn˩ という後置詞があり，動詞の後に置いて「一緒に～する」という意味を表す（例 (26) 参照）。

しかし，例 (26) は相互文ではなく，例 (26) のミゾ語の文をコンサルタントにラルテー語に訳してもらっても，例 (27) のように再帰・相互標識の -duːn˩ は現れなかった。さらには，ミゾ語における後置詞 =duːn˩ は，ラルテー語の -duːn˩ のように再帰文を作ることもできないので，共時的には別の形態素と見るのが妥当である（例 (28), (29) 参照）。

(26) kan˩= kal˥˧ =duːn˩
1PL= go˥ =together
「私たちは一緒に行った。」 ＜ミゾ語＞

(27) ka˩= kel˥˩ =heːl˩ =uʔ˩
1= go˥ =together =PL
「私たちは一緒に行った。」

(28) kan˩= en˥˩ =duːn˩
1PL= look.at˥ =together
「私たちは一緒に見ている。」 ＜ミゾ語＞

(29)* ka˩= en˥ =duːn˩
1SG= look.at[1] =together ＜ミゾ語＞
（私は自分を見ている。）

Chhangte (1993: 93) は，ミゾ語で再帰または相互を示す接頭辞 in˩- について，「ある事象を引き起こす直接的な原因が明確に示せない場合，再帰・相互を表す接頭辞 in˩-を用いる」と述べている（例 (30) 参照）。ティディム・チン語で再帰または相互を示す接頭辞 ki˩- も同じようなはたらきを持っている（例 (31) 参照）。ただし，ミゾ語の接頭辞 in˩- と異なる点として，ティディム・チン語の接頭辞 ki˩- は pai˩「行く」などの自動詞に付くこともあり，その場合にもティディム・チン語の接頭辞 ki˩- は動作者を明示しないはたらきを持つ（例 (32) 参照）。

(30) koŋ˥kaː˥ a˥= in˩- hoŋ˥
door 3= REFL- open(tr.)[1]
「ドアが開いている。」 ＜ミゾ語＞ (Chhangte 1993: 93)
（誰が開けたかのは分からない。）

(31) koŋ˩xaːk˥ ki˩- hoŋ˩
door RECP/REFL- open[1]
「ドアが開いている。」 ＜ティディム・チン語＞

(32) tuː˥niː˩ xo˥dou˥poːi˥ =aʔ˩ ki˩- pai˩
today Khua Do festival =LOC RECP/REFL- go[1]
「今日，[人々は] クアドウ祭に行きました。」＜ティディム・チン語＞

ラルテー語の -duːn˩ にも，ある事象を引き起こす直接的な原因を明確にしないはたらきがある。動作者を明示しないことよって動詞の取る項が減少する点では，上述の相互文や再帰文と同様である。以下の例 (33) は他動詞 hoŋ˩「開ける」の後に -duːn˩ が付かない例で，例 (34) は -duːn˩ が付いたものである。しかし，ティディム・チン語の例（例 (32) 参照）のように，「行く」をはじめとした自動詞に再帰・相互標識が付く例は，現調査段階ではラルテー語で確認できていない。

(33) tʰaŋ˥a˩ =in˩ koŋ˥kʰaʔ˩ ʔa˩= hoŋ˥
PR =ERG door 3= open (tr.)[1]
「タンガはドアを開けた。」

(34) koŋ˥˩kʰaʔ˩˧ ʔa˩˧= hoŋ˥˩ -duːn˩
door 3= open[I] -RECP/REFL[J]
「ドアが開いた」

4. まとめ

本論文では，ラルテー語における再帰・相互標識 -duːn˩ の形態・統語的特徴について報告した後，後半ではその他のチン語支諸言語における再帰・相互標識と対照しながら考察を進めた。

多くのチン語支の言語において，相互を示す標識と再帰を示す標識は同一形式であり，接辞などの拘束形態素として動詞の前に付加する。ラルテー語においても相互を示す標識と再帰を示す標識はどちらも -duːn˩ で同一形式だが，動詞の後に付加するという特異な形態的特徴を持つ。さらに，動詞に属する語において特徴的に見られる２つの語幹形式，すなわち -duːn˩ と -dut˩˧ を持つ点で，他のチン語支諸言語とは異なる性質を有している。

今回，チン語支の諸言語との対照的な考察を行ったことによって，ラルテー語における -duːn˩ とその周辺言語における再帰・相互標識との間に機能の違いがあることが分かってきた。例えば，ティディム・チン語において再帰や相互を示す接頭辞 ki˩˧- が動作者を明示しない機能を持ち，様々な動詞に積極的に付加するのに比べ，ラルテー語の -duːn˩ は，ミゾ語の in˩˧- と同様に，その機能が限られるようである。

今後，更にラルテー語の文法記述を進めながら，再帰・相互標識 -duːn˩ および -dut˩˧ の機能を明らかにしていきたいと考えている。

略号

- (affix boundary) 接辞境界
= (clitic boundary) 接語境界
A>B (A toward B) AからBへの方向
A/B AまたはB
1 一人称
2 二人称
3 三人称
I (verb stem form I) 動詞語幹形式 I
II (verb stem form II) 動詞語幹形式 II
DET (determiner) 限定詞
EMPH (emphatic) 強調
ERG (ergative) 能格
IMP (imperative) 命令
INCL (inclusive) 包括
LOC (locative) 位格
MM (middle voice) 中動態
NEG (negative) 否定
PERF (pefect) 完了
PL (plural) 複数
PR (proper noun) 固有名詞
PTCL (particle) 小詞
Q (question particle) 疑問小詞
RECP (reciprocal) 相互
REFL (reflexive) 再帰
SG (singular) 単数
SUBORD (subordinator) 従属節助詞
tr. (transitive verb) 他動詞

参考文献

Chhangte, Lalnunthangi (1993) *Mizo syntax*. Ph.D. Dissertation, University of Oregon.

Dixon, R.M.W. (2012) *Basic linguistic theory: Further grammatical topics* 3. Oxford: Oxford University Press.

George A. Grierson (1904) Tibeto-Burman family: Specimens of the Kuki-Chin and Burma groups. *Linguistic survey of India* 3(3), 75–78. Calcutta: Office of the Superintendent of Goverment Printing.

Hammarström, Harald, Robert Forkel and Martin Haspelmath (2017) Glottolog 3.0. Jena: Max Planck Institute for the Science of Human History. <http://glottolog.org/resource/languoid/id/ralt1242> [accessed August, 2017]

Hillard, Edward (1974) Some aspects of Chin verb morphology. *Linguistics of the Tibeto-Burman area* 1, 178–185.

L.Y. Zahnuna (2013) *Translation book: English-Hindi-Mizo in Roman script.* Aizawl: SINNGULA&SONS.

Matisoff, James A. (2003) *Handbook of Proto-Tibeto-Burman: System and philosophy of Sino-Tibetan reconstruction*. Berkeley: University of California Press.

大塚行誠 (2015) 「ラルテー語における音韻体系：ミゾ語及びティディム・チン語との対照的考察」『東京大学言語学論集 電子版（eTULIP）』36, 49–59.

大塚行誠 (2016) 「ラルテー語の基礎語彙とテキスト」『アジア・アフリカの言語と言語学』10, 325–344. 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

Payne, Thomas E. (1997) *Describing Morphosyntax: A Guide for Field Linguists.* Cambridge: Cambridge University Press.

Simons, Gary F. and Charles D. Fennig (eds.) (2017) *Ethnologue: Languages of the world, twentieth edition.* Dallas, Texas: SIL International. Online version: <http://www.ethnologue.com>. [accessed April, 2017].

So-Hartmann, Helga (2009) *A Descriptive grammar of Daai Chin [STEDT Monograph 7]*. Berkeley CA: University of California.

Thomas E. Payne (1997) *Describing morphosyntax: A guide for field linguists*. Cambridge: Cambridge University Press.

VanBik, Kenneth (2009) *Proto-Kuki-Chin: A reconstructed Ancestor of the Kuki-Chin languages [STEDT Monograph 7].* Berkeley CA: University of California.

Yamashita Smith, Tomoko (1998) The middle voice in Lai. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 21.1, 1–52.

The Reflexive/Reciprocal Marker *-du:nʃ* in Ralte

Kosei OTSUKA

Keywords: reflexive, reciprocal, Kuki Chin, Ralte, Mizoram, Tibeto-Burman

Abstract

Ralte, a language classified in the Kuki–Chin subgroup of Tibeto–Burman languages, is spoken primarily in Mizoram in northeast India. This paper provides an overview of the reflexive/reciprocal marker *-du:nʃ* in the Ralte language based on data collected in Mizoram in 2017, in comparison with the corresponding markers of the other neighboring Kuki–Chin languages. The reflexive/reciprocal marker shares an interesting morphological feature with verbs in that it has two alternating forms, -du:nʃ and -dutɹ, like any other verbs in Ralte.

（おおつか・こうせい　大阪大学）